朝鮮石人像を訪ねて（69）

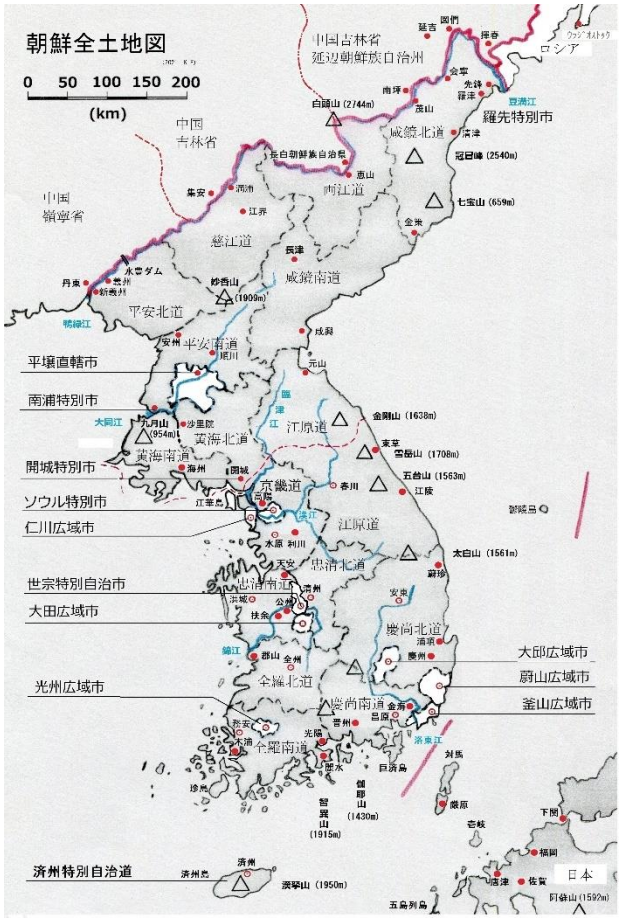
深田　晃二

～朝鮮半島地図、利川五層石塔、返還された石造物その他～

1. 朝鮮半島地図

今月は技術士会の２つの会合で石人像について講演した。準備する中で、半島の歴史上の国々（楽浪、馬韓・弁韓・辰韓、高句麗、百済、新羅、伽耶、統一新羅、高麗、朝鮮王朝）の版図がどのように展開され、遺跡はどこのものか判るようにするため基礎的な半島地図を作成した。世宗特別自治市（2012.7.1 発足）は韓国の友人からの指摘で追加したが、この地名は全く知らなかった。

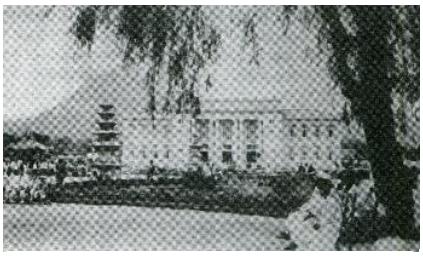
この地図は輪郭トレースから全て自作ですので、著作権を気にせず自由にお使い行ください。要求あればJpegや PDF ファイルをお送りします。「ペイント」などで改作も自由に行っていただいて結構です。また利川市や北関大捷碑の帰った金策市（東海岸）も表示している。



2. 利川五層石塔

利川五層石塔については「失われた韓国の文化財」の「解題（P334）」に詳しいので紹介する。

『当初大倉集古館側は、景福宮から東京へ持ち出して建てた資善堂の横に建てるには、平壌駅前にある円広寺址六角七重石塔が最も適当と搬出許可を申請した。しかし、総督府傘下の古跡調査委員会では、平壌の石塔は 1906 年に平壌駅車場を設置した時から既に現地にあったし、人びとがよく知っているので、日本へ搬出する事はリスクが大きいと考えた。委員会は歴史及び工芸の参考となるような遺物は朝鮮に保存する必要があるので、相対的に価値が劣る石塔を持って行けと勧めた。それに沿って朝鮮物産共進会に展示するために京畿道利川郡邑内面から移転し、当時総督府博物館前に立てられていた利川の石塔を搬出するよう指示した。



利川五重石塔と朝鮮物産共進会美術館

1915 年総督府博物館前

元来、利川の石塔は利川郷校前の廃寺址に位置していたが、寺の名称は知られておらず歴史的に考証が難しいので、平壌駅前の石塔より価値が劣るから、搬出しても良いという意味である。実際利川石塔搬出の件は、基本的に朝鮮の文化財は朝鮮に置くことを原則としていた総督府の政策的な立場とは相反する。当時文化財を闇取引することが相当多く、当該事案が発覚すると石造物の場合、もとの場所へ返還せよという命を下し、私有財産権侵害という反発を買うことが度々あったことをみると、利川の石塔は特異な例である。大倉集古館が文化財を蒐集して、一般観覧客に公開することで、朝鮮古美術の研究に適合としたのは表面的理由であり、大倉側の政治的な力や交渉力が普通では無かったことを示唆する。利川石塔は以後返還されず、現在も東京大倉文化財団の所蔵である。』

2010.10.29 大倉集古館にて

五層石塔の帰還を待つ利川の現地

むくげ通信 244 号で、2010 年 10 月 29 日に聯合ニュースが「大倉文化財団、利川五層石塔返還の意向表明」と伝えたが、11 月に入り誤報である事が判ったと書いている。大倉集古館を訪問したその日のニュースで喜んだが、誤報という結果にがっかりした事を覚えている。

3. 返還された石造物その他

3.1 静岡清水玉川楼から石人像１体返還（1997.5）

～静岡の地酒研究会コピーライター鈴木真弓氏の取材日記より抜粋～

この石人像は、清水の老舗料亭・玉川楼の６代目主人・府川荘四郎氏の父が戦後まもなく知人から譲り受け、客室の庭に安置されていた。府川氏は日韓友好のために生まれ故郷に帰してあげたいと強く願っていた。府川氏がかつて属していた清水JC(青年会議所)が韓国仁川JCと1967年から姉妹提携しており、交流事業を行っていたので、清水JCに相談したのが1993年頃だった。1997年の友好JC30周年記念事業としてJCを挙げて取り組むことになり、1996年から「里帰り大作戦」が始まった。金両基氏と金巴望氏に石像調査を依頼し、朝鮮王朝中期の石人像と確定した。JC会員の無償ボランティアにより清水から横浜経由で２週間かけて仁川に到着(船便)。入国時に美術品に課せられる高額の関税を掛けられそうになったが、横浜の韓国総領事館と仁川JCの奔走により、両国が覚書を交換し高額関税なしに入国できたという。1997年５月31日の姉妹都市締結30周年式典でお披露目され地元市民に歓迎された。関係者は「長年交流を重ね、仁川に友人が出来たおかげです」と振り返っていたという報告である。

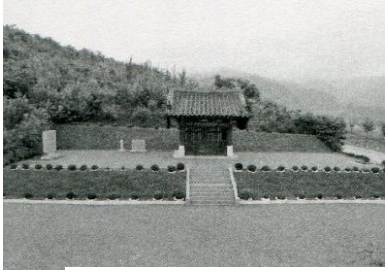
「戦後まもなく知人から譲り受け」とあるが、元々は興津井上馨候爵邸にあったものだという情報がある。

3.2 北関大捷碑の返還（2005.10→2006.3）

南永昌遺稿集の「連載を終えて(注4)」(P181)に本件に関して詳細に記述されているので転載する。

『豊臣秀吉による朝鮮侵略の際、義兵を起こして加藤清正軍と戦い、遂には撃退した鄭文孚（チョンムンブ）の功績と将兵達の戦功を記録したもの。1709年咸鏡北道吉州（現在の金策市）に建立された。日露戦争の時、豆満江にいたロシア軍を攻める為にこの地に進出した日本軍に第２後備師団の池田正介旅団長が村人を脅して引き抜き、本国に転任する三好成行師団長に託したとされている。碑は1905年に広島に到着。日清戦争の「戦利品」記念館に陳列され、その後、靖国神社に移された。当初は、「遊就館」のそばにあったが、近年は本殿近くに、まるで人目に触れさせたくないかのように放置されていた。2004年７月、韓国に返還を促進する汎民族運動本部が発足。同年12月には北南の民間団体の間で南から北に引き渡すことで合意、靖国神社側は外交ルートを通じて2005年３月に返還の意思を表明。同年10月に駐日韓国大使館と日本の外務省、神社の３者が返還合意書に署名した。こうした過程を経て10月20日、碑はいったん南側に返還された。2006年３月１日、南から北に引き渡された。日本から元の所在地に戻るまで、実に101年ぶりの帰還となった。』

むくげ通信230号に靖国神社にあった時の写真を載せている。下の写真は金策市へ戻された後の姿である。



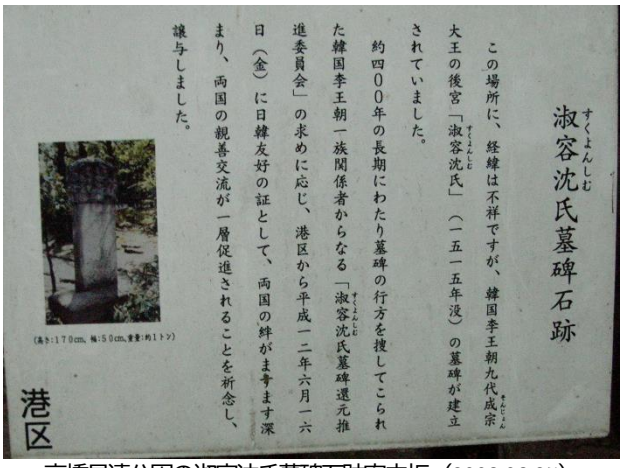
元あった金策市に戻された北関大捷碑

3.3 淑容沈氏墓碑石の返還（2000.6）

東京港区高橋是清公園にあった淑容沈氏墓碑石を元むくげの会会員の尹達世氏が調査し、朝鮮朝第九代王の成宗(在位1469～1494)の側室に当たる女性の墓であると明らかにした。どのような経緯で墓石が公園内にあったのかは管理する港区も元の管理者である東京都も一切判らなかった(1999.11.3民団新聞)。

2000年７月、400年ぶりに日本から高陽郡津寛里に帰ることになった。

むくげ通信230号に高橋是清公園にあった時の写真を載せている。



高橋是清公園の淑容沈氏墓碑石跡案内板（2008.08.25）

3.4 その他(むくげ通信での報告号数記載)

(1) 2001.7 三重県白山町石人の郷・日下守氏から石人像70体が世中古石博物館へ(通信253号)

(2) 2006.5 朝鮮王朝実録47冊が東京大学からソウル大学へ(通信305号)

(3) 2009.8 鹿児島南洲神社から望柱石１基が鎮海市へ(通信236号)

(4) 2011.11 宮内庁から朝鮮王室儀軌81部167冊が韓国へ(通信305号)

(5) 2019.7 神奈川県藤沢市尾澤輝行氏から世中古石博物館へ石人像８体(通信295号)　　(続く)